

アメリカと世界を変革したバトラー博士—その人と思想

木村利人

Ribito Kimura

恵泉女学園大学学長

私がはじめてバトラー博士にお目にかかったのは、東京で1994年10月5日～7日に開催された読売新聞創刊120周年記念国際医療フォーラム「21世紀への挑戦—『ロマンと人間回復』」に招かれ来日された時のことだった。その基調講演でバトラー博士は、ユーモアも交え、穏やかな話しぶりで聴衆を魅了した。私も分科会の講演者の一人として、このフォーラムに参加していたので、バトラー博士の基調講演に聞き入った。

当時の私のメモには、『バトラー博士が、「Aging」という英語よりも、日本語で使われている「長寿」つまり「Longevity」という言葉の方が、前向きで良い言葉だと思うと述べられたのが印象に残った』と書いてある。この基調講演の後で、バトラー博士と直接お話しする機会があった。私の専門であるバイオエシックス（生命倫理）への深い知識と理解をふまえ、日本の高齢者とバイオエシックスについての関心を表明されておられた。

翌年の1995年にはアメリカのワシントンD.C.において「第4回・高齢化に関するホワイトハウス会議」（White House Conference on Aging）が開催された。当時のクリントン米国大統領のスピーチの次にバトラー博士がこの会議の議長として登壇し、基調講演をされたのが強い印象に残って

いる。

この時のバトラー博士の基調講演は、高齢者のライフ・スタイルの充実を目指した内容の極めて力強いメッセージであり、連邦政府の高齢者への対応にふれつつ、高齢者医療と健康保険の根本的な変革と未来への展望を訴えるものであった。私も国際オブザーバーの一人としてこの会議に参加していたのでバトラー博士に再会し、お話を伺いする機会があった。別れ際に、森岡茂夫理事長をはじめ日本の国際長寿センター（International Longevity Center）の方々にくれぐれも宜しくお伝え下さいと力強く握手して下さった。

このようなバトラー博士との出会いとそのさまざまな業績を通して学んだことを、私なりに次の三点にまとめてみた。

第一に、バトラー博士は、わたくし自身が個人的にお話をお伺いした時の経験からしても、本当に誠実で素晴らしい人間的魅力にあふれておられた。

文は人なりと言うが、たとえば、ピューリッツァー賞受賞の“Why survive? Being Old in America (1975)”の内容は、バトラー博士の暖かい眼差しと豊かな人間性にあふれている。

豊富な臨床経験に基づいたバトラー博士の思想はたとえば、“Productive Aging”（1985）や



1994年読売新聞創刊120周年記念
国際医療フォーラムにて講演する筆者

“The Longevity Revolution” (2008) そして、“The Longevity Prescription” (2010) 等々の著書にまとめられ、アメリカのみならず国際的な観点からも、高齢者についての認識の変革と、加齢の積極的な意義と評価を定着させた。

第二に、バトラー博士は周知のように、英語の「Ageism」という用語を1968年につくり出し、高齢者差別をなくすために全力を尽くされた。バトラー博士の思想と熱意と実践とが高齢者医療をはじめ、米国連邦政府の高齢者政策や立法、更に高齢者がProductiveで柔軟性に富み、積極的に人生を楽しんでいるとの実証的な新しいイメージ作りに貢献した。

第三に、バトラー博士は、高齢者医療を、21世紀のビジョンをふまえつつ正しく位置づけ、医療のみならず、広く社会的な広がりの中での高齢者の視座からアメリカ社会の方向付けを行い、新たな変革へとアメリカを導き、それは世界的にも波及効果を及ぼした。

すなわち、クリントン大統領によって「高齢化に

関するホワイトハウス会議」の諮問委員会議長に任命されるなどアメリカ国内での重責に加え、米国外では国連の2002年・第2回高齢化に関する世界会議での「高齢者の人権宣言」にも大きく貢献し、バトラー博士の思想は世界的な広がりを持つに至ったと言える。

また、1990年に日米の2カ国で創設され、現在は世界の12カ国からなるILCグローバル・アライアンスの共同事業・研究の展開についても、バトラー博士は熟慮に富んだリーダーシップを発揮され、国際的に高く評価されてきたことも指摘しておきたい。

バトラー博士のご冥福を心からお祈りするとともに、私たちはバトラー博士の素晴らしい人となりにより、その豊かな思想を受け継いでいきたい。そのことにより、一人一人のいのちが尊ばれ、全世代により支え合う高齢社会の創造への責任を、バトラー博士とその思想につながる多くの方々と共に、未来に向けて担うものとなりたくと心から願っている。



読売新聞全国版1994年10月24日付けをもとに作成（この記事・写真などは読売新聞社の許諾を得て転載しています）